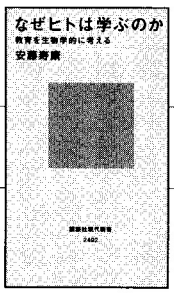
BOOK
ブック

本書は、動物にとっての学習を「経験による行動の持続的変化」であるとする。そして、利他的行動は動物界とくに霊長類に広く行き渡った重要な生物学的特質であり、知識をわざわざ他者に学習してもらおうと手助けする教育という行動を、コストがかかるのに行うことも、「互恵的利他主義」に基づくものであるとする。また、行動遺伝学の知見から、学業成績については、教育や本人の力で変えられる要因は残念ながら2割弱で、あとは遺伝の影響が5割、家庭環境の違いが3割だという。

しかし、ヒトは、自分一人だけで行う個体学習や、ヒトのふりを真似する観察学習だけでは、生きるための知識を十分に学べないため、ヒト特有の「教育による学習」は依然として重要だという。そのための教育とは、他人よりもよい成績をとろうと競い合うためではなく、また自分自身の楽しみを追求するためだけでもなく、むしろ他の人たちと知識を通じてつながりあうためにあるとして、「互恵的利他主義」を強調する。そこでは、学校が教育の一つの正統な場であることはひとまず認めざるを得ないとした上で、「問題は学校と学校外の教育による学習をつなぐ理論やしくみがないこと」と指摘する。

評者は考える。われわれも、親や子の表層的ニーズに振り回され、学業成績だけに追い回されがちである。しかし、本当の教育の目的は、人格の完成とともに、利他的行動や社会形成のための能力を育成することにある。学校教育の視野を、学校外教育等の横にも広げ、生徒の卒業後の充実等の縦にも広げて、生涯学習社会の中での学校独自の役割を再確認すべきではないか。

（前聖徳大学教授・西村美東士）



なぜヒトは学ぶのか
教育を生物学的に考える

安藤寿康　著
907円　講談社現代新書
☎0120-29-9625